

## 82. 日越漢語対照データベースの開発と応用研究

東洋大学 国際教育センター 専任講師 陳 秀茵

### 概要

本研究は、日本語とベトナム語に共通する「同形語（形が一致する語）」に着目し、字形・音韻・意味・用法の特性を多角的に分析したものである。4,790語の漢字語彙を対象に、辞書調査とベトナム語母語話者の補足調査を行い、語彙の対応関係と分類を整理した上で、ベトナム人日本語学習者による意味推測調査を実施した。その結果、字形と意味が一致する完全一致型（AB/AB）の語彙では正答率が高く、学習者が視覚の手がかりを頼りに意味を推測しやすい傾向が明らかとなった。一方で、意味や品詞にずれのある語彙では推測の誤りが多く、「負の転移」のリスクが示唆された。特に、品詞の対応にずれがある語では誤用の可能性が高く、指導上の配慮が求められる。本研究は、これらの知見をもとに、日越同形語の活用可能性と教育的応用の方向性を提示するものであり、日本語教育の現場における基礎資料としての活用が期待される。

### 研究背景と研究目的

本研究の背景には、社会的、学術的、実践的な課題がある。まず社会的背景として、在留ベトナム人は2010年の約4万人から2023年末には56万5026人に急増しており、就労者や留学生への日本語教育は喫緊の課題である。しかし、ベトナム語に精通した教師が不足し、教育基盤の整備が遅れている。

次に、学術的背景としては、日本語とベトナム語に共通する漢字語彙が多く、日本語学習に有利とされる一方で、これまでの研究は音韻的類似性に偏っており、字形や意味を含む包括的な対照研究は少ない。

また、実践的背景としては、日本語教育現場で活用できる資料が少なく、日本語教師が語彙の対応を個別に調査する必要があり、負担が大きい（陳, 2020）。また、ベトナム人日本語学習者も漢字語彙を体系的に学ぶのが難しく、効率的な習得が困難である。

こうした背景の下、本研究では特に以下の三つの課題に着目する。第一に、日越間の語彙対応や類縁性に基づいた体系的な教材資料が不足しており、学習者や教師が活用しやすい基礎資料が求められている点。第二に、語彙の類似性が「正の転移」をもたらす一方で、意味や用法のずれによる「負の転移」も生じており、その指導上の対処法が未整備である点。第三に、対照分析の知見が教育現場に十分活かされておらず、指導の効率化が課題となっている点である。

以上を踏まえ、本研究は、以下の三点を目的としている。第一に、日本語とベトナム語に共通する同形語について、字形・音韻・意味・用法といった言語的特性を整理し、日本語教育において扱われる語彙の特徴を記述することを目指す。第二に、隣接分野の知見を踏まえつつ、同形語がベトナム語話者に与える影響のうち、とりわけ意味や用法のずれ、品詞のずれによって誤解や誤用を招く「負の転移」に焦点を当て、その実態と具体例を明らかにする。第三に、これらの分析結果をもとに、日越同形語を活用した効果的な語彙指導の可能性を探り、教育現場で実用可能な基礎データおよび指導方法の提案を行う。

## 研究方法

本研究では、日越同形語の語彙的特性を明らかにするために、四つの段階に分けて調査と分析を行った。まず、『旧日本語能力試験出題基準語彙表』に掲載された語彙の中から、漢字を含む語彙 4,790 語を抽出し、それらの語彙がベトナム語においてどのように対応しているかを確認するために、日越辞典および越日辞典を用いて語彙の対応関係を詳細に調査した。

次に、辞書の情報だけでは把握しきれない現代語彙の使用実態を反映させるため、ベトナム語母語話者による分類の補足調査を実施した。この調査によって、語彙の現代的な使われ方や意味の広がりをもりの確に把握することが可能となった。

さらに、日本語とベトナム語の品詞間における対応関係を調べ、特に品詞のずれがどのような傾向を持つかについて分析を行った。これにより、学習者がつまづきやすい語彙や誤用が生じやすい語についての手がかりを得ることができた。

最後に、抽出した語彙を字形・意味の一致度に基づいて分類（AB/AB 型、AB/BA 型など）し、学習歴の異なるベトナム語話者を対象にアンケート調査を実施した。アンケートでは、提示された日本語の語彙について、その意味をベトナム語から推測できるかどうかを問う形式を取り、分類ごとの意味推測可能性を検証した。この一連の調査を通じて、日越同形語の教育的活用に向けた具体的な知見を得ることを目指した。

## 結果および考察

本研究の分析により、日越同形語の視覚的・意味的な一致度が、語彙の意味推測に与える影響が明確に示された。特に、字形と意味の両方が一致する「完全一致型（AB/AB）」の語彙においては、ベトナム語話者の正答率が平均 85.2% と非常に高く、学習者が字面の手がかりをもとに日本語の語彙の意味を的確に推測できることが確認された。

一方、字形の一部や意味が一致しない「部分一致型（AB/BA）」や、「意味の対応が不十分な異義型（AB/CA）」の語彙では、正答率が大きく低下する傾向が見られた。特に、AB/CA 型では正答率が 3 割と著しく低く、例えば「活動」「指導」などに対して、意味を誤って解釈する例が多く見られた。これは、漢字表記が視覚的に一致していても、意味的なずれがある場合に「負の転移」が生じやすいことを示唆している。

また、品詞の対応関係に注目した分析では、「日本語では名詞であるがベトナム語では形容詞である」「日本語では動詞であるがベトナム語では名詞である」といった品詞のずれが多く確認された。例えば、日本語の「重要（形容詞）」に対応するベトナム語「tầm quan trọng」は名詞であり、語の使用文脈に違いが生じる可能性がある。こうしたずれは、日本語学習者の誤用を引き起こす要因となるだけでなく、語彙運用の難しさにも繋がる。

以上の結果から、日越同形語は、学習者にとって語彙習得を促す有効な手がかりとなる一方で、語義や品詞の相違によって誤解を生じるリスクも併せ持っていることが明らかとなった。したがって、教育現場においては、同形語の分類に基づく語彙リストを明示的に提示し、特に「負の転移」が起こりやすい語彙に対しては、ベトナム語との意味や品詞のずれに着目した指導を取り入れることが有効であると考えられる。

さらに本研究の知見は、日本語教育のみならず、今後の語彙データベース構築やデジタル教材の開発にも貢献し得る。同形語の分類や品詞の対応関係といった情報は、教育工学や自然言語処理分野との連携においても基礎資料として活用できる可能性がある。特に、学習者の誤用傾向を蓄積し可視化する仕組みを作ることで、誤用予測に基づく自動フィードバック教材の開発などが期待される。また、本研究で得られた語彙対照の枠組みは、ベトナム語以外の漢字文化圏以外の言語話者、例えば、インドネシア語やタイ語などの学習者にも応用可能であり、学習者の母語と日本語の語彙的距離に基づく語彙習得支援の方向性を示すものでもある。今後は、同様の視点で複数言語の語彙対照データを整備し、より包括的な多言語対応日本語教育の基盤構築を進めていく必要がある。

(完)

## 研究成果の公開

- 1) (単著) Proposal for Enhancing Kanji Education for Vietnamese Japanese Learners through Insights from Related Fields, 14th International Conference on Han Characters Education and Research, The University of Hong Kong.
- 2) (単著) 「日越同形語の特性に関する考察 — 『旧日本語能力試験出題基準語彙表』を用いた分析—」日本漢字学会第7回研究大会、2024年12月15日、於東京外国語大学
- 3) (単著) 「日本語教員に求められるもの：成長する教師を目指して」神戸大学国際文化学研究科日本語教育レクチャーシリーズ、2023年2月15日

## 引用文献

- 1) 岩月純一・Pham Van Khoai (2011) 「ベトナム語における近代漢語とその起源」『日本語学』30(8), pp. 60-74, 明治書院
- 2) 王力 (1948) 「漢越語研究」《嶺南學報》9-1, pp.1-96
- 3) 陳秀茵 (2020) 「ベトナム人日本語学習者への漢字教育に関する研究の現状と課題－今後の研究の方向性と可能性－」『東アジア日本学研究』(3), pp.75-84
- 4) 富田健次 (2005) 「ベトナム語」『言語学大辞典』三省堂、pp.759-787
- 5) 松田真希子 (2016) 『ベトナム語母語話者のための日本語教育』春風社
- 6) 三根谷徹 (1993) 『中古漢語と越南漢字音』汲古書院